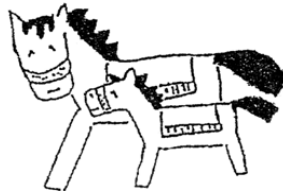


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

27年 10月 NO. 251



(厚生労働省・高松市委託事業)

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

～どなたでも～ 10月の主な活動 ～お気軽にどうぞ～

10月 3日	土	体験保育 10:00～12:00	お子さまと同じ年齢のクラスに 入っていっしょにあそびましょう。
10月11日	日	運動会においで！ 9:00～12:00	旧新塩屋町小学校（現・教育センター）です。小学生も おじいちゃん・おばあちゃんもどうぞおいで下さい。
10月17日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も子育て体験に おいで下さい。
10月17日	土	おとなアート 14:00～16:00	植物のイメージから成長する力や 生命力を表現します。小学生もどうぞ。
10月23日	金	おはなしの会 10:00～11:30	9月は都合でお休みでしたので、お月様や たぬきの絵本読みなどあります。
10月28日	水	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師（小児科）にゆっくり 相談できます。（予約要）
10月30日	金	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	谷本智子氏（臨床心理士）に「最近の子ども事情」 についてお話いただき、フリートークします。

・火～金の13時～16時までは、園内開放しています
ので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談（月～土）9：00～18：00

しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



忘れもの
田舎の駅の待合室に、
まぢあいに
しづかに夜は更けました。
ふ
いつものお汽車を待つのにや。
ふ
い
る
の
お
汽
車
を
待
つ
の
や
ら。
た
だ
ひ
と
り。
し
ま
い
の
汽
車
に
お
ど
ろ
い
た、
虫
も
ひ
そ
ひ
そ
鳴
く
こ
ろ
に、
箒
も
も
つ
た
お
じ
い
さ
ん、
じ
り
り
と
み
つ
め
て
お
り
ま
し
た。
ふ
る
い
ん
の
人
形
の
か
あ
さ
ん
は、
と
お
く、
こ
だ
ま
が
ひ
び
き
ま
す。
し
づ
か
に
虫
は
夜
ふ
け
て、
な
い
て
ま
す。



「幼児理解と保育援助」(ミネルヴァ書房)という本を読んでいて、保育者など大人がこどもの心の中を理解するという事はどういうことなのか、心に残ったエピソードがありましたので、ご紹介します。

エピソード1 ホースで他の子に水をかけることをやめない子

(背景) この男の子(年中児)は、父親の仕事で1歳半でアメリカに行くことになり、アメリカの幼稚園では、机に座って勉強し、帰国したのは数カ月前でことばがなかなか通じなかった。好きな遊びは水と紙飛行機で、遊び始めると長く持続する。

(エピソード)

夏のある日の保育園でのこと。何人かの子どもの水場の近くにたらいを出してもらって水遊びをしていました。そこに午前中、私が一緒に紙飛行機を作って飛ばした年中児の男の子がやってきてホースで水を飛ばしてあそび始めました。その子どもは、たらいの中で遊んでいた子どもにも水をかけ、もっと遠くで遊んでいる子どもたちにも水をかけようとします。自分に近づいて来ようとする者には、子どもでもおとなでも水をかけます。何人ものおとなと子どもが彼を遠巻きにしています。年長児らしい子どもが「やめろ」と何度か怒鳴ったのですが、彼は緊張した白っぽい、固い顔つきで、聞こえないかのようにホースで水をまき続けています。とうとう、さっきから「やめろ」と言っていた男の子の1人が、隙を見つけて飛びかかり、ホースをつかみとり、その子どもの頭をたたいたので、その子は激しく泣き出しました。そこまで成り行きを見守っていた先生が、長時間彼を慰めながら諭していました。



(相談をうけた先生からのコメント)

ことばの遅れはありますが、そのうち追いつくでしょう。それよりも彼の立場に立ってみた方がおとながどうすればよいのか見えてくる気がします。

1歳半ということばが出始める時期に、つまり身体の内側にいっぱい日本語をたくわえて、これからしゃべりだそうという時期にアメリカにいかなくてはいけなかった。そうして、アメリカの幼稚園でつらい生活を始め、友だち同士のかかわりが本格的になる時期を前にして、もう1度、日本語の世界に飛び移ることになった。何ひとつ彼の意志によるものではありません。どうしてそうしなければならないのか、理由も納得できなかったかもしれません。そう考えると、この人は人生の大半を過酷な環境に生きてきたとっていいのではないか。彼は、生きることはとても過酷なことと感じているかもしれません。彼の表情から憎しみは少しも感じられませんでした。その場面の彼から私が感じたのは、無表情、緊張感、必死さ、などでした。彼が水をかけるのは、どういうことなのでしょう。他の子どもやめさせようと思って彼に近づくと、彼はその子どもに向かって水をかけます。彼と彼を取り巻

く人たちとの間には、緊張関係があった。その構図自体が、彼がつくり出して表現したかったものだと考えられないでしょうか。つまりそれが今の彼にとっての問題なのであり、彼がどうにかしたいと思っていることなのかもしれない、と考えてみるのです。また、子どものなかにはおとなに唾をかける子どももいます。自分の体の中から出てくる唾を吐きかけることのなかには、自分が相手にとって邪魔な存在ではないかという疑いと同時に、相手にかかわりたいという気持ちがあるのではないかと思います。同じようなことが、あの子にも起きているかもしれません。かかわりたいけどかかわれない、みんなのなかに溶け込みたいけど、溶け込めない、自分は邪魔者ではないか、そういう葛藤やうたがいをあの子はもっているかもしれません。その子どもと他の人びととの関係が「困った存在」とそれをとりまくおとなと子どもという構図にならないように、あえて言えば、それを壊すように解釈をしました。そのために、担任の先生だけでなく先生方みんなで、この子どもを苦難の人生を歩んできたひととして、想像してみました。集団生活になじまない彼の行動を危機の表現とみて、彼の心の痛みを想像できるようになれば、それだけで彼は随分と息がしやすくなるだろうと考えました。

ある子どもに対する先生方の見方が根底から変わったことは、何も言わなくてもあくる日にはその子どもに感じとられます。そしてまた、その子どもが先生にとって困った存在ではなくなったことは、他の子どもたちにもすぐに伝わります。これは、不思議ですが厳粛な事実です。保育にたずさわる人は、この事実を知らなければならないと思います。



エピソード2 他の子を突き飛ばす子

(背景とエピソード)

ある幼稚園の先生の話です。担任をしている3歳児クラスの子ども。自分が歩いているとき、目の前に現れた子どもはだれかれかまわず突き飛ばす。3歳児だからころころ転ぶ。ことばは少し遅めの子ども。友だちにことばで自分の気持ちを伝えようとしない。他の子どもがけがをしそうで、保育者は目が離せない。保育者に体を預けることがない。保育者たちからも、子どもたちからも「危ない子」と思われている。他の子と遊ぶことは少なく、園の玄関にある水槽の金魚を見るのが好き。家では、最近、赤ちゃんが生まれている。

(相談を受けた先生との話し合い)

どうしたらいいか悩んでいる若い先生と、その子どもの気持ちを想像してみました。その子どもは、家の生活のなかでも園の生活のなかでも、自分を十分に発揮できないと感じているのではないか。遊びに行きたいのに赤ちゃんのために遊びに行けない、とか、他の子どもと仲良く遊びたいのに、ことばがうまく使えないために、

自分の気持ちをいい表せなかったり、他の子どものいうことを聞かざるを得なかったりしているかもしれない。自分の気持ちがまず動き、次に行動するということ、つまり「自分からする」ということが十分できない生活を送るとき、子どもはどんな気がするだろう。目の前に現れるものすべてが、自分の行く手をさえぎる邪魔者のように感じられないだろうか。

また人間は、前から怖いものが迫ってきたときも、本能的に腕を前に突き出して防ごうとする。その子どもが園の中で危険な子どもとして恐がられているなら、その子どもはとても孤独だろう。他の子どもや先生たちを、自分に親しみを向けてくれない怖い存在と思っているかもしれない。押すことのなかにその両方の気持ちが入っている可能性もある。そう話し合いました。



(2カ月後、保育者より)

前回、「この子はこういう気持ちでいるかもしれない」という可能性に気づけたことがよかった。次にその子に出会うとき、気持ちに余裕が生まれた。話をした翌日、この子どもがほかの子を押し倒したとき、いつものように叱るのではなく、「M君はどうして友だちを押したくなるんだろうね。お友だちのことが好きなのにね。きっとM君にもわからないんだね。」と話しかけた。話しかけている自分の気持ちに余裕があると感じた。すると、その日、はじめてM君が自分の膝に入ってきた。その日以来、その子が他の子どもを押しことは目に見えて少なくなった。以前のように危ないと感じるような押し方ではなくなった。また「・・・してほしいんだったら、『・・・して』って口で言おうね」というと、だんだんそうするようになった。以前、よく突き飛ばしていた女の子と、今は一緒に遊びたがる。しかし、もう1人、その女の子とあそびたい男の子がいる。M男がその女の子に「遊ぼう」といっても、「今、A君と遊んでるからダメ」と断られることがある。すると、どうしていいかわからず悲しそうに泣くようになった。それがとてもかわいい。



(相談をうけた先生からのコメント)

ある子どもの行為を、その子どもの心の世界の表現として理解することは、知らず知らずにとらわれている見方から自由になることなのでしょう。それを彼女は「気持ちに余裕が生まれた」といったのだと思います。そして、そういう保育者の変化を、子どもは瞬時に感じ取ります。また、現実をどうとらえるかということは、保育者にとっては自分の〈賭け〉であり、新しい行為のはじまりだと思います。リアリティ(本当らしさ)ということばには、〈現実〉という意味あいもあります。保育者が自分の解釈にリアリティがあると感じられるときには、まざまざと感じられるものだから、「今度はこうしてみよう」という気持ちが自然におこり、体が自然にそう動くのではないのでしょうか。